大分県夏秋ピーマン栽培におけるＩＰＭの実践と課題

大分県農協ピーマン生産部会竹田支部　入田慎太郎

大分県の夏秋ピーマンは、収穫量が全国 4 位、西日本では 1 位の産地となっている。近年の安心安全ニーズの高まり、また生産者の高齢化による薬散防除の省力化およびコスト低減から大分県の指導の下、害虫の天敵導入、耕種的物理的防除などが全県的にすすめられている。

報告者は就農から１０年であるが夏秋ピーマンを中心とする家族経営を行っている。ピーマン栽培は、タバコガ、アザミウマ、アブラムシを主要害虫とし、被害果が商品価値をなくすためそれらの防除が経営上の課題である。

タバコガに対しては雨よけハウス内の防虫ネット張り込みによって薬剤散布回数を減らすことができた。アザミウマに対しては天敵である「スワルスキーチリカブリダニ」の放飼によって栽培期間中のアザミウマ被害を限定的に抑え込むことが可能であった。

アブラムシは近年、ネオニコチノイド剤に対して薬剤抵抗性を持つ個体群が出てきているため効果的な薬剤が限られてきている。このためアブラムシの密度を低く抑えるため、施設内にアブラムシの天敵であるアブラバチ類を呼び込む対策にも取り組んでいる。ピーマンハウス内にソルガムを植え付け、ソルガムに寄生するアブラムシを宿主にアブラバチを定着させ、薬散の回数を減らせるように努めている。

本報告では、大分県の指導協力の下で進められているこれらのＩＰＭ技術の導入経緯とその効果、課題を生産者の立場から述べていく。

図.1 防虫ネットを張ったハウス

図 2. スワルスキーカブリダニ放飼風景